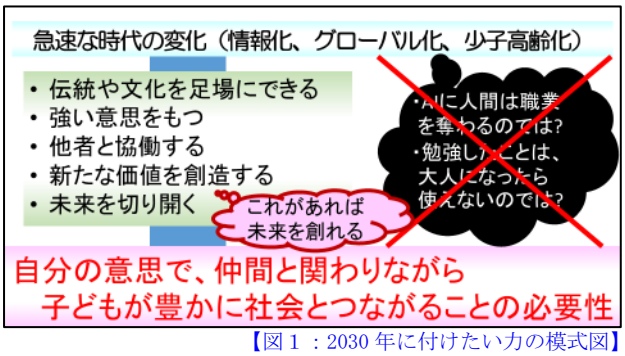
岐阜小学校　社会科　研究主題

よりよい社会の実現を目指す子が育つ社会科学習
～子どもが社会とつながる授業を通して～

１　こんな子どもを育てたい！

（１）　2030 年を生きる子どもたちに付けたい力



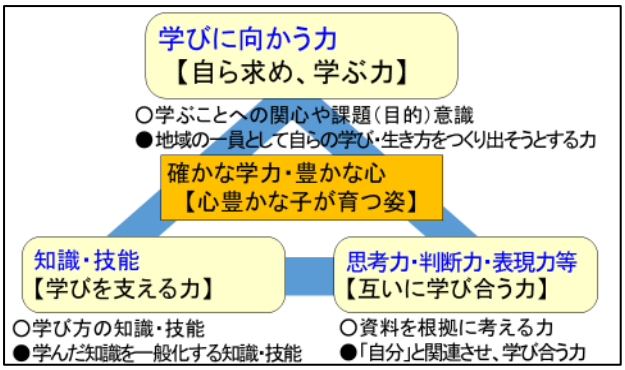
【図１：2030 年に付けたい力の模式図】

現在の小学生が活躍する 2030 年の社会は，今以上にグローバル化が進み，多くの人々が高速で関わり合い，一つの出来事が広範囲かつ多様に構築されていくと予想される。また，子どもたちの約６割が今は存在しない職業に就くだろうと予測されるなど，従来の考え方や方法では解決できないことや先々までの見通しをもつことは，今後更に難しくなるものと思われる。

このような未来を生きていく子どもたちだからこそ，様々な人々と関わり合いながら，自らの手で，よりよい社会や幸福な人生を創り出していくための，基盤となる力を身に付けていくことが必要であると考えている。

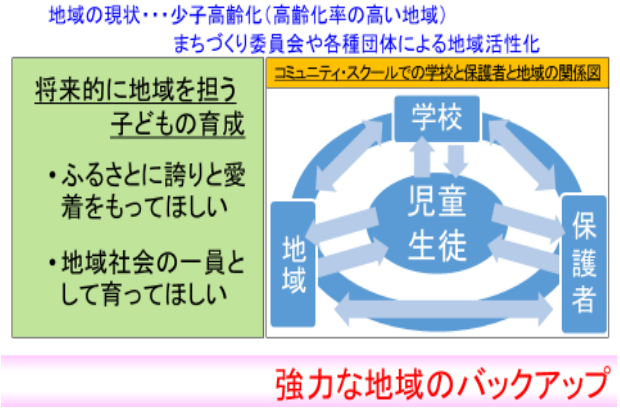
（２）　岐阜小学校の児童の実態

昨年度の全国学力・学習状況調査や岐阜市の「学習状況のアンケート」を基に，岐阜小学校の児童の実態を分析したところ，下の図２のような傾向が見られることが明らかになった。



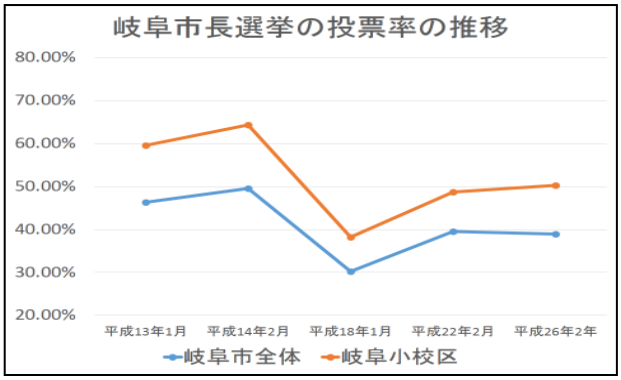
【図２：３観点を基に把握した児童の実態】

（３）　地域（岐阜小学校区）の特長



【図３：岐阜小学校と地域とのつながり】

上の図３のように，コミュニティ・スクールである岐阜小学校は，12 年前に統合した両地域の伝統や文化，尊厳や品格を含めた教育力を基盤に，家庭や地域と一体となった活動を推進している。



【図４：岐阜市長選挙の投票率の推移】

岐阜小学校区は，上の図４からも分かるように，市長選挙における投票率が市の平均よりも毎回約 10%も高い地域である。将来，そんな地域を担うことができるように，ふるさとに愛着と誇りをもち，地域の一員として社会に参画することができる児童の育成を目指している。

これらの点を踏まえ，「よりよい社会の実現をめざす子が育つ社会科学習～子どもが社会とつながる授業を通して～」を研究主題に設定した。

この実践を通して，「よりよい社会の実現を目指す子」の姿を次のように捉えることにした。

- **人々の社会的な営みや願いに共感しながら，社会生活に関して理解**する姿【知識及び技能】
- 社会的事象の意味を，**資料や既習の知識，仲間の考えと関わらせながら，追究**し続ける姿【思考力・判断力・表現力等】
- 「私は今まで～」「他のことで考えると～」「これからは～」などと**よりよい社会の実現への意欲や思いが高まる**姿【学びに向かう力・人間性等】

また，そのための研究仮説を次のように立てた。

子どもと地域がつながる教材を開発し，**社会的事象の見方・考え方を働かせながら**社会的事象の特色や意味を自分とつないで考えたり，獲得した社会認識を生かしたりする場を単元に位置付け，一単位時間内で仲間と共に社会的事象の特色や意味を**「自分のこと」として考えられる**よう，**児童理解に基づいた指導・援助**を行えば，よりよい社会の実現を目指す子が育つだろう。

２ 研究内容・研究実践

【研究内容１】教材化や単元構成の工夫

（１）社会的事象を自分のこととして捉えることができる地域を生かした教材の開発

（２）意識の連続性を大切にし「社会的事象の見方・考え方」を明確にした単元構成

【研究内容２】学習活動の工夫

（１）社会的事象を関連付けて捉え，多角的に考える学習活動

（２）社会への関わり方を考える学習活動

【研究内容３】指導・援助の工夫

（１）社会とのつながりに気付く３つの見届け

○研究内容１について

（１）社会的事象を「自分のこと」として捉えることができる地域を生かした教材の開発

岐阜小学校は，これまでも地域とのつながりを大切にし，地域素材のよさを生かしながら，教材開発に取り組んできた。

研究の成果として，地域素材を活用するよさを次のようにまとめることができると考えている。

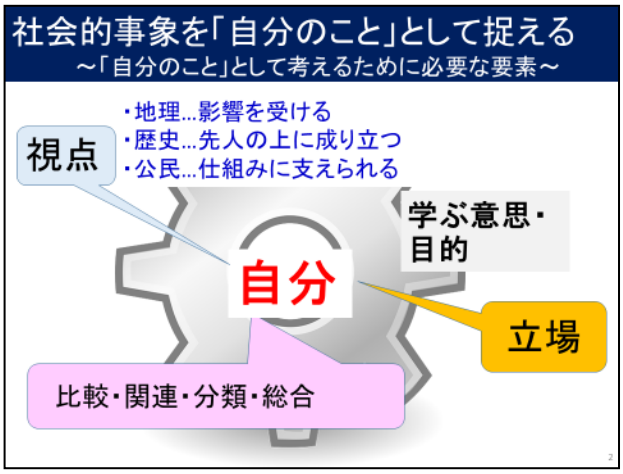
- 課題追究の際に自分の生活経験とつないで考えやすく，追究意欲を高めることができる。
- 市民の立場や消費者の立場で考えやすく，多角的に考える子どもを育てることができる。
- 地域や人物を身近に感じることで，「今日的な社会の課題」「人物の深い思い」により迫ることができる。
- 単元終末において，自分にできることを明らかにしやすく，よりよい社会生活へ生かそうとする態度を高めることができる。

さらに，社会的事象を「自分のこと」として捉える姿は，学習指導要領を参考にした上で，実践を積み重ねたことによって，以下のようになることが分かってきた。

まず，「よりよい社会の実現を目指す」ということは，自分が社会とつながり，社会を動かしていくことだと考えた。これを歯車と例えて示すと，下の図４のようになる。

【図４：社会と自分との関係の模式図】

次に，「社会を動かす自分」に必要な要素とは何かを洗い出し，下の図５のように示すこととした。



【図5:「自分のこと」として考えるために必要な要素の関係を示す模式図】

それは,「社会を動かす自分」をつくり出すために必要な要素は，以下の４つに整理できることが分かってきたからである。

①　社会を見るために必要な「着目する視点」
②　多角的に考えるための「立場」
③　社会的事象の特色や意味を考える方法
④　追究を支える「学ぶ意思・目的」

① 社会を見るために必要な「着目する視点」

私たちが生活する社会は，先人の営みの上に立ち，社会システムの中で互いに影響を受けながら成り立っている。社会科学習を通してこのことが分かるために，次の３つを「着目する視点」として示し，意識しながら追究できるようにした。

【着目する視点】
・地理的な視点…位置や空間の広がり
・歴史的な視点…時間の変化
・公民的な視点…人や社会の仕組み，関わり

② 多角的に考えるための「立場」

世の中で起きている事実を客観的に捉え，公平な判断をするには社会的事象を多角的に考えることが大切であるが，そのためにどの立場に立つかは多様である。以下にその一部を示した。

【多角的に考えるために必要な立場】

・生産者	・消費者	・行政（国・県・市）
・国民	・地域の人	・自分
・高齢者	・子ども	・障がい者
・為政者	・武士	・農民（百姓）　など

③ 社会的事象の特色や意味を考える方法

①や②を生かして社会的事象の特色や意味を考えるのだが，視点と視点をつないだり，立場を分けたりして考えるための方法を理解し，活用することで，さらに考えを広げ深めることができる。

そのために，２つ以上の出来事について，以下の考え方などを活用して追究できるようにした。

・比べて考える。　…（比較）
・つないで考える。　…（関連）
・分けて考える。　…（分類）
・まとめて考える。　…（総合）

④ 追究を支える「学ぶ目的・意思」

①～③に加え，学ぶ意思や目的が加わることによって，自分という歯車を回すことができる。つまり，学習指導要領の３観点で示されている「学びに向かう力，人間性」を高める学習の展開が大切だと考えたのである。

このようにして，社会的事象を「自分のこと」として捉えられるように実践を重ねてきたものの，どこか物足りなさも感じるようになってきた。子どもたちは「自分で社会とつながり，社会を動かしたい！」と願っても,「社会とつながっている」という実感を得られなかったからである。

そこで私たちは，下の図６のように「社会」と「自分」の間に,「地域」という歯車をもう１つ噛ませることにした。地域と関わらながら学習をすることを通して，子どもたちは授業や授業後の活動において,「社会を動かしている」と感じることができると考えたのである。

【図6:「自分のこと」として社会と関わる関係を示した模式図】

実践を積み重ねることにより，子どもたちが社会の出来事を「自分のこと」として捉えられるようになってきた。具体的には,「私だったら～」と，その場所，その時代，その人物の気持ちで，考えを深められるようになった。また,「私の考えは，～の場面で役立てられる。」「～だから，もっと関心をもちたい。」と自分が活躍する場面を意識して語ることができるようになったのである。

【実践：６年生「世界に歩み出した日本」】

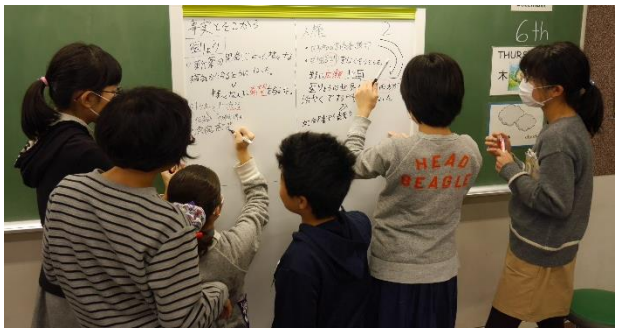
この単元では，我が国の国力充実と国際的地位向上を考えるために，条約改正などの社会的事象から追究できるようにした。しかし，歴史学習は現代に近付くほど政治の仕組みも複雑になることから，内容が抽象的になったり，細かい用語・数値や仕組みなどを覚えるだけの指導になったりするという課題もある。

そこで，身近な人物の事例を基に日本の歴史を考えることによって，社会的事象を「自分のこと」として捉えられるようにしたいと考え，当時の岐阜小学校区で，国民生活の向上，女性の地位向上

のため，日本初の養護教諭として活躍した「広瀬ます」を，教材として扱うことにした。

この単元の終末には，単元の課題「日本が欧米に追いつくことができたのはなぜか」について，子どもたちが，それぞれに特徴的な事象を取り上げて議論をした。その上で，「広瀬ますの営みは，国力充実や国際的地位向上とは，どのような関連があるのだろう」と問いかけた。そのことによって，「この時代を作ったのは国民全員であり，それぞれの立場で，よりよい国をつくるために取り組んだからこそ，国家は成り立っているのだ」という考えにまで，深めることができた。

地域の人材を生かし，主体的に問題解決を図ることを通して，よりよい社会を考え，社会とつながることの大切さに気付き，「自分も地域の一員として歩みだしたい」と，よりよい社会の実現を目指す姿につながったと言える。

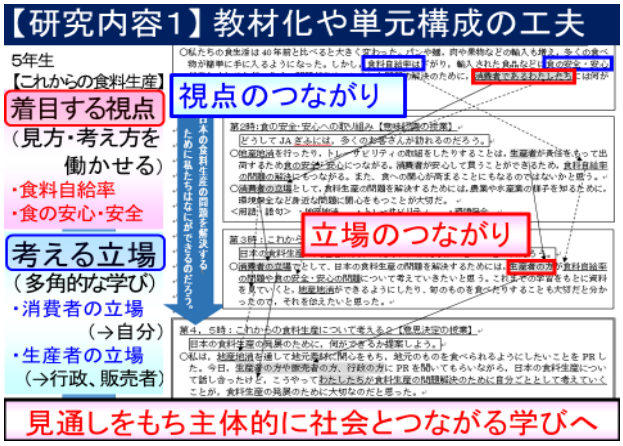


【写真1:「広瀬ます」の営みのよさついて議論を交わす6年生】

（２）意識の連続性を大切にし「社会的事象の見方・考え方」を明確にした単元構成

子どもたちが，よりよい社会の実現を目指して力強く歩み出すには，「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を身に付けた上で，主体的に社会と関わっていくことが大切である。

そのために，子どもたちが１単位時間の中で何を身に付けるべきかを明らかにした上で，単元構成の中に，「課題をつくる」（主に見通しをもつ），「事実認識」（主に知識・技能を身に付ける），「意味認識」や「まとめる」（主に思考力・表現力を身に付ける），「選択・判断」（判断力を身に付け，学びに向かう力，人間性を育む）授業を位置付け，授業の役割をはっきりさせるようにした。また，「次は、どうしてそうなっているか考えたいな」など，子どもの学びへの意識がつながっていく単元構成になるように留意した。



【図７：視点や立場の位置付け「社会的事象の見方・考え方」を明確にした単元構成表のイメージ図】

さらに，子どもたちの学びをより確かにするためには，単元を通して「社会的事象の見方・考え方」を働かせることが大切である。

そこで，「（社会を見るために必要な）着目する視点」，「（多角的に）考えるための立場」を明らかにし，単元構成表に表記するようにした。

単元を通して学ぶべき「内容」，働かせる「社会的事象の見方・考え方」が明らかになることで，子どもたちは見通しをもって追究することができ，学ぶ意欲が高まるとともに，視点を関連付けた考察などの「深い学び」にもつながる効果があると考えた。

【実践：３年生「ものをつくる仕事」】

この単元では，地域の人々の生活との関連を考えるために，単元を通して仕事の種類や工程を「着目する視点」として追究した。また，生産者と消費者それぞれの立場から多角的に追究し，経済の基礎を身に付けることを試みた。

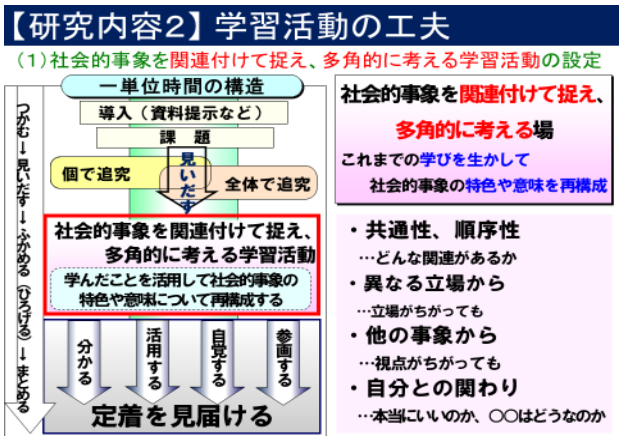
まず，仕事の種類に着目して単元の課題を作り，生産工程に着目して仕事の様子について調べた上で，生産工程や仕事の様子の意味を，人々の生活と関連させながら考えるようにした。

このことで，生産工程には消費者のことを考えた工夫があることに気付くことができた。単元終末には，再び仕事の種類に着目し，他の業種の仕事についても考えた。ここから，地域のお店が，自分の住んでいるまちの人々の生活と密接な関わりがあることを実感することができた。

「社会的事象の見方や考え方」を働かせ，多くの立場で追究した学習は，子どもたちに社会的事象を「自分のこと」として捉え，地域との関わりをより強いものにしたいと願うことができた。

○研究内容２について

（１）社会的事象を関連付けて捉え，多角的に考える学習活動



【図８：１単位時間の授業モデル】

子どもたちが１単位時間内で，仲間と共に社会的事象の意味を「自分のこと」として考えるために，上の図８のような授業モデルを考えている。その中で，全体交流で見いだした考え（社会認識）を再構成する（社会的事象の特色や意味をさらに広げ，深める）ためには，次の４つが有効だと考えている。

① 共通性や順序性を考える。
② 「異なる立場」から考える。
③ 「他の事象」から考える。
④ 自分との関わりで考える。

【（１）-①の実践：４年生「特色ある地域の人々のくらし」】

学習課題「和紙をすくのをやめる人が多いのに，どうして鈴木さんは今でも本美濃紙をすき続けているのか」を受け，子どもたちは「よさを広める」「伝統を守る」という予想を基に追究した。全体交流を通して，「多くの人に使って欲しいから広めたり守ったりする」という解を見出した。

その上で，「鈴木さんは，広めることと守ることのどちらを大切に考えているのだろう」と共通性や順序性について，問いかけを行った。「えっ，決められない」と，子どもたちに戸惑いが生まれたものの，これまでの資料を基に再考し，「和紙のよさを広めようとしている」や「伝統技術を守ろうとしている」などの意見交流を通して，「伝統技術を未来へつなぐために，本美濃紙を広めたり，紙すきの技術を残そうとしたりしている」ということをより明らかにすることができた。

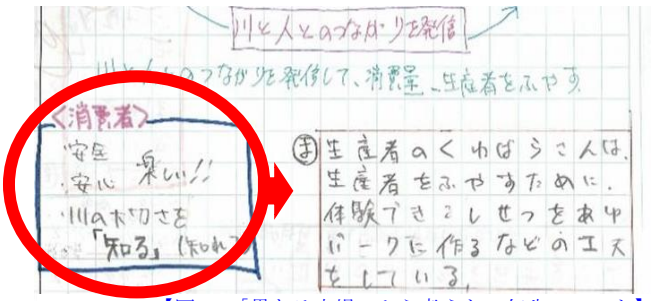
子どもたちにとって，距離的には近いとは言えない美濃市の出来事を，身近なことに引き寄せる問いかけによって，社会的事象を「自分のこと」として捉えることにつなぐことができた。

【写真２：鈴木さんの願いを考え，発言する様子】

【（１）-②の実践：５年生「これからの食料生産」】

これからの日本の食料生産の発展に向け，様々な立場の人々の取組を考えるために，生産者と販売者の２つの立場を兼ねている複合施設「清流長良川あゆパーク」を取り上げ，食料生産の発展における施設の役割を考えるようにした。

しかし，役割を考えるだけでは，施設の仕組みや工夫だけの理解に終わってしまうため，生産者と販売者の立場から追究した後，改めて「消費者にとっては，あゆパークはどんなよさがあるのだろう」と，施設の役割を消費者の立場に立って，さらに追究できるようにした。



【図９：「異なる立場」から考えた５年生のノート】

この施設の利用をきっかけにして，「清流長良川あゆパークで働く人々が，国産食料の消費量の増加や，漁業に関わる人や生産量の増加をねらっている」と理解することができた。加えて，消費者にとっても「川を楽しむこと」や「川のことを知ること」ができるなど，水産業への関心を高める施設であることにも気付くことができた。

生産者と販売者の立場で課題を追究し，単元終末で消費者の立場からも考えることで，生産・販売・消費の三者を，それぞれに関わらせながら追究することができた。このことによって，これからの食料生産の発展のための取組について，理解を深めることができた。また，消費者の立場でも

課題追究したことで，食料生産の発展と施設の役割を，自分と関わらせて考えることができ，社会的事象を「自分のこと」として捉えることにつながったと言える。さらに，「日本の食料生産の発展へ関心をもち続けること」という自分の行動のあり方にも，つなぐことができた。

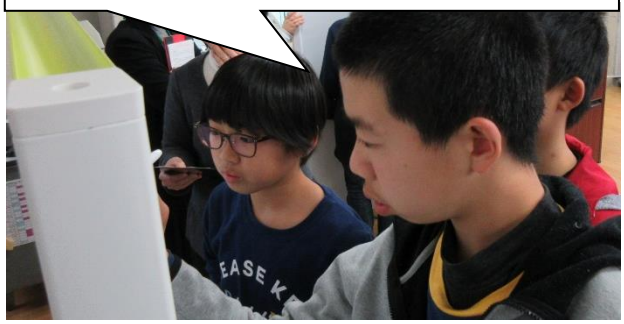
【(1)-③の実践：6年生「戦国の世から天下統一へ」】

学習課題「なぜ，織田信長だけがとびぬけて大量の鉄砲を使ったのか」を受け，子どもたちが軍事と経済の側面から追究し，全体交流で「経済力に支えられた軍事力があったからだ」という解を見出すことができた。それを受け，当時の地図とフロイスと信長が語る様子の資料を基に，「どうして織田信長だけが経済力の有効性に気付くことができたのか」を改めて考える場面を設けた。すると，子どもたちは「信長はフロイスとの世界の動きを話したことで経済のことを考えたんだ」，だから「もっと貿易を拡大させ経済を高めたいと思った」，それが「たくさんの鉄砲をもつことや強力な軍事力につながっているんだ」と，経済政策と天下統一の関連を，外交面からもさらに深く考えることができた。

また， 450 年も前に天下統一を目指し，世界を見据えて日本の政策を考えていた織田信長の面影を，この岐阜の地だからこそ感じることができた。このことは，子どもにとって見えづらい時間の流れを住んでいる場所とつなぐことによって，歴史という社会的事象を「自分のこと」として捉えることになった。

さらに，歴史を学ぶ楽しさやロマンを感じたり，日本の偉人と同じ場所で同じことを考えることができる喜びを味わったりするなど，過去，現在，未来の時間軸をたどり，自分自身の生き方を考えることにもつながった。

フロイスと信長が，世界地図や地球儀を見ながら語っているよ！！この頃から世界を見て，日本を考えていたんだね。



【写真3：信長が感じ取った経済力の有効性を外交面から考える様子】

【(1)-④の実践：4年生「自然災害からくらしを守る」】

この単元のねらいは，地域の自然災害や関係機関との協力などに着目し，追究することを通して地域の関係機関や人々が，自然災害に対して協力して対処したことや，今後の災害に対して様々な備えをしていることを理解することである。

そこで，「長良川の水害から命を守るために，私たちには何ができるのだろう」という学習課題に対し，子どもたちは既習と資料を基にし，時間軸ごとにどんな行動をとるべきかを考えた。そして，学級で意見を交流する中で，「早く」「安全に」避難することの大切さが明らかになった。

それを受け，全体交流の中で意見として出た「地域の方と一緒に避難する」という発言を取り上げ，「自分が水防団や自主防災団の方のようにできることはないか」と，さらに「長良川の水害」という社会的事象を，自分との関わりで考えることができるような問いを投げかけた。

子どもたちは「地域の方と一緒に避難するために，日頃からもっと声をかける。」「地域の活動に積極的に参加する。」など地域の一員として自分の行動をより深く考えることができた。

身近な人の営みに触れながら，自分の行動を考えることは，学びを「自分のこと」として再構成することになった。そして，これからもこの地域で生きる一人として，主体的に社会と関わっていこうとする態度の育成につながったと言える。

このタイミングで避難していたら遅い！もっと早く避難するようにしよう。すると地域の人と一緒に避難できるよ。

【写真４：仲間と共に大雨が予想されるときの自分たちの行動について議論している様子】

（２）社会への関わり方を考える場の設定

子どもが社会とつながり，よりよい社会を目指していくためには，「社会的事象の見方・考え方」を働かせながら，自分ができることを考え，決めていく学習を仕組むことが必要である。

それには，次の２つが有効である。

① 学んだことを一般化する。
② 社会への関わり方を選択・判断する。

【(２)-①の実践：３年生「ものをつくる仕事」】

本単元では，意味認識の授業で「亀甲屋本舗の寺澤さんが，機械化せずに手焼きで鮎菓子を作っているのは，お客さんに喜んでもらう鮎菓子にするため，自分で改良した道具を使って生地を薄く広げる必要があるため，１枚１枚丁寧に焼き上げるためである。」ということを学習した。

しかし，ここで学習を終えれば「亀甲屋本舗さんの寺澤さん」の工程における工夫の学習になってしまい，「地域の生産の仕事が，地域の人々の生活と密接な関わりをもって行われていることを理解すること」にはならない。

そこで，他の業種の工程を取り上げ，「共通して大切にしていることは何か」と問うことにした。それによって，お客さんに喜んでもらうために，１つ１つ丁寧に作られていることが分かった。

地域の他業種の方も同じように，私たち消費者のために，ものをつくる仕事に従事していることに気付くことにより，自分たちの住む地域のものづくりの仕事の素晴らしさを明らかにすることができた。

こうして，単元終末に地域の人々の生活との関連について，将来の自分との関わりで考え，願いをもつことで，社会を身近に引き寄せるだけでなく，地域への憧れにつなぐことができた。

【(２)-②の実践：6年生「願いを実現する政治」】

本単元を通して，子どもたちは，岐阜市の行政や役所の役割，租税の働きを学習した上で，市民の願いを実現するための政策について，「ぎふメディアコスモス」の建設を通して学習してきた。

その上で，単元終末に「岐阜市役所の跡地活用案の中で何を選ぶとよいのか。」という課題を作り，これまでの学習を基に，岐阜市が大切にしている「にぎわいの創設」を具現するために大切なことは何か考え，選択・判断をする学習を展開した。

子どもたちは，「多くの人が集まるイベントのためにホールがあるとよい」「お母さんやお年寄りのためになるから商業施設があるとよい」「家族連れのために公園が欲しい」など，どんな施設にするとよいかを提案し合い，一本化するために話し合うことで，岐阜市に住むさまざまな人々の立場を考えながら，具体的に取るべき行動（政策）を選択・判断することができた。

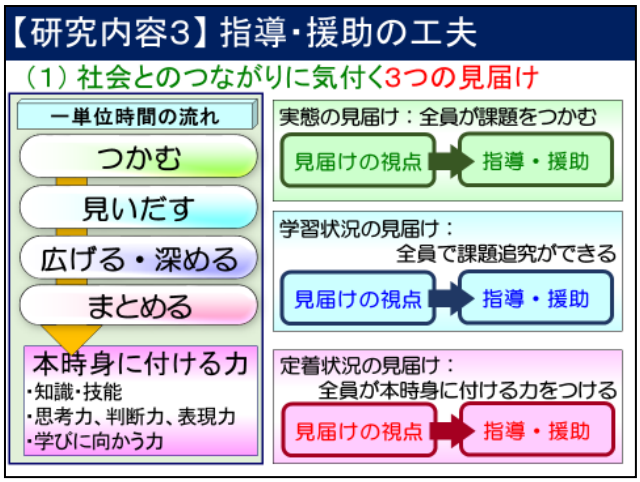
多くの立場に立ちながら，多角的に考え，話し合ったり，まとめたりする活動の中で，社会への関わり方を選択・判断することを通して，市民の一員としての行動がより明確になった。社会的事象を「自分のこと」として捉えて考えたことで，地域の一員として，これからの政治のことを考えることを通して，社会と関わることができた。

【写真５：岐阜市役所の跡地活用の中で余暇を楽しむ人の立場から考えを説明する様子】

○研究内容３について

（１）社会とのつながりに気付く３つの見届け

子どもたちが，よりよい社会の実現を目指すためには，「子どもと社会がつながる場面」を１つでも多くつくり出し，１単位時間の学びを充実させようと，以下の図 10 のように指導・援助を進めてきた。



【図 10：３つの見届けに着目した１単位時間の学びのデザイン図】

特に，見届けの視点として，以下の３点を大切にした実践をすることが効果的だと考え，それに対応する指導・援助を行った。

① 実態の見届け　（主に，つかむまでの段階）
② 学習状況の見届け（主に，見いだす，深める段階）
③ 定着の見届け　（主に，まとめる段階）

【(1)-①の実践：５年生「これからの食料生産」】

子どもたちが本時までにどのような力を付けているかをより具体的に把握することによって，本時の「深い学び」につながると考える。

そのために，「発言内容や前時までのノート記述，単元の始めにとるアンケート」など，日々得られるものに加え，前単元の評価テストなど数値として得られる情報を加えた児童理解に努めている。

【研究内容3】多面的な児童理解の見方

	学びに向かう力	思考力・判断力・表現力	知識・技能
単元テスト ・米作りのさかんな地域 ・水産業のさかんな地域		○視点を基に思考する力が付いている	○資料の読み取り ●知識・技能の定着が不足
アンケート ・野菜を買う場所、買うときに気を付けていること	●児童の生活経験の不足		
ノート記述 ・授業終末のノート	○意欲的な追究 ●自分ごとで考える姿が弱い	○根拠を基にまとめる	○資料から事実を読み取る
発言内容 ・全体交流での発言 ・ハンドサイン	●生活経験を基に語る児童が少ない	○根拠を基に話す ○比べて聴く	
児童の観察 ・個人追究の様子 （ノートや指導内容など）	○意欲的な追究 ●自分ごとで考える姿が弱い	●複数の事象の関連を明らかにできていない	○資料から事実を読み取る

【研究内容3】多面的な児童理解の具体

【研究内容3】指導案への反映方法

【児童の実態】

○前単元「米づくりのさかんな地域」「水産業のさかんな地域」の学習では，日本の食料生産の課題を克服しようと取り組む人物の働きを通して，国民の食生活が支えられていることに気付き，生産者の立場になって今後の農業，水産業の発展について意欲的に追究できている。

○社会的事象の意味を明らかにするために，地形や気候，技術や文化といった追究の視点を活用しながら課題解決のために必要な資料を選択しながら調べる力がついてきた。

○資料・既習などの経験を基に話す力や，仲間の発見を「～と同じ。」「～と違う。」などと比べながら聴く力がついてきたため，視点や立場を明らかにして考えることができるようになってきた。

●我が国の食料生産の問題について，社会的な見方や考え方を働かせながら，社会的事象の相互の関連性を考えることについて難さがある。

●食料生産の問題を解決するために，自分ごととして考えをもったり，選択・判断したりする力には個人差がある。

６　本時の展開（５／５）

過程	主な学習活動	見届ける視点（◇）と指導・援助
つかむ５分	１　前時を振り返り課題を確認する。 日本の食料生産の発展のために，何ができるか提案しよう。 ２　グループで作った考えを GT に発表した上で，	◇学習課題をとらえ，追究の見通しをもてたか。（つぶやき・挙手） 【「実態の見届け」を基にした指導・援助】 ・本時の見通しをもつために，プレゼンで大切なことを問いかける。

【図 11：実態の見届けの過程一例】

【(1)-②の実践：５年生「日常的な指導の歩み」】

単位時間の中で願う児童の姿を基に，「学習の見届けの視点」を次のように設定し，「見届けの視点」と「指導・援助」を具体化した。

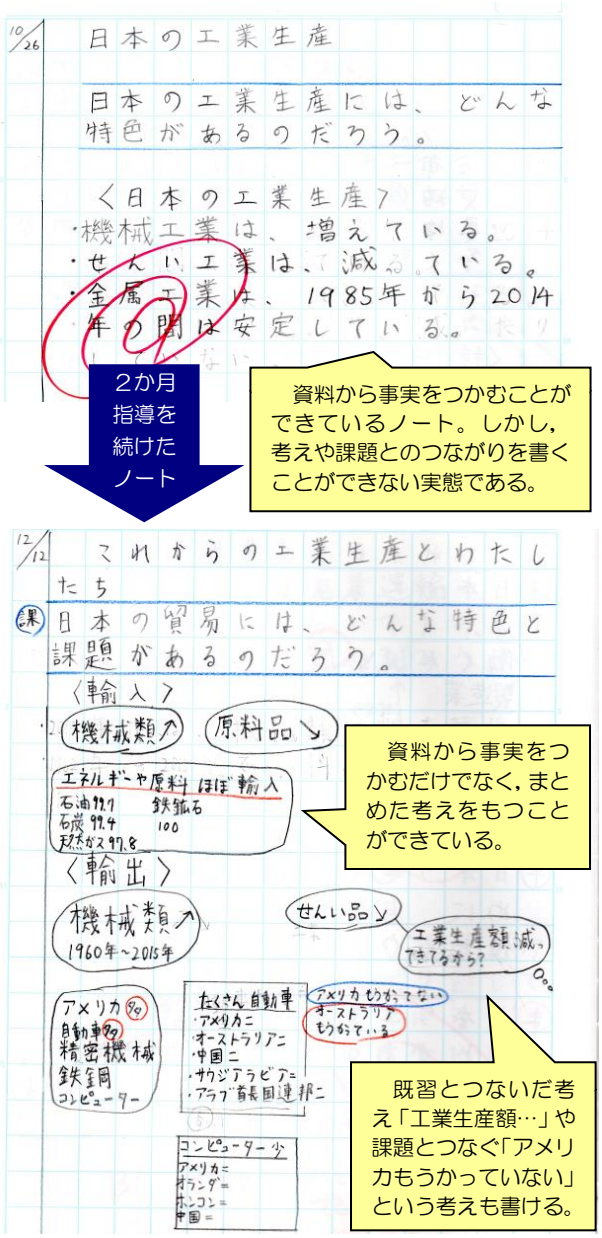
【研究内容3】学習状況を見届ける

個の追究時の見届けの視点	全体追究時の見届けの視点
◇資料から事実がつかめている ◇事実を基に考えを作っている ◇考えたことを課題とつないで考えている	◇仲間の話と比べ、考えを広げている ◇仲間の考えをつないで、深めている ◇仲間との追究から分かることをまとめようとしている

指導・援助の具体

・資料の見方や事実、仲間の発言を基に考える視点の助言
・資料の事実や仲間の発言を基に考えを広げたり、深められる問いかけ
・仲間のよさを広げるための意図的指名、価値付け

【図 12：学習状況を見届けるイメージ図】



【図 13：学習状況の見届けによって変容した児童のノート】

子どもたちのつまずきを把握することで，的確な指導・援助を行えるようになり，子ども一人一人の学びの状況も把握しやすくなるため，指導の手立てを瞬時に打つことができた。

【(1)-③の実践：５年生「日常的な指導の歩み」】

子どもが単位時間に身に付ける力を積み上げることにより，子どもが社会とつながり，よりよい社会の実現を目指す児童が育つと考え，以下の２つの方法で，子どもの学びを見届けることにした。

ア） キーワードを活用して，本時のまとめを書く。

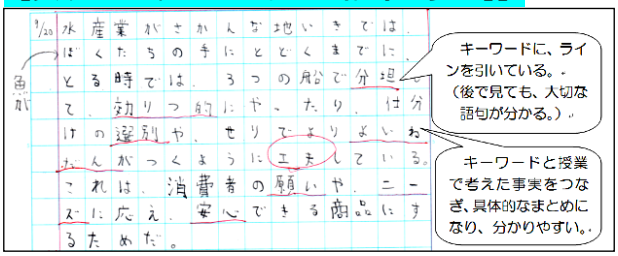
【研究内容3】定着状況を見届ける

ア）キーワードを活用して，本時のまとめを書く
（「わかる（知識・技能）」「活用する（思考・判断・表現）」パターン）

◇課題の答えとなるように書く →その際に大切なキーワードを活用

＜文例＞
〇〇が□□なのは、【キーワードA】が【キーワードB】になるからである。このことから私は･･･。

【実践：５年生「日常的な指導の歩み」】



【図 14：定着状況を見届けによって変容した児童のノート】

キーワードを活用しながら文章にまとめることによって，子どもたちが本時身に付ける社会認識や考え方が分かると同時に，教師側も社会認識を活用しながら文章を組み立てているかを見届けられるため，互いに効果的なものとなった。

イ） 考えの変容を示しながら，本時のまとめを書く。

【研究内容3】定着状況を見届ける

イ）考えの変容を示しながら，本時のまとめを書く
（「自覚する・参画する」（学びに向かう力）パターン）

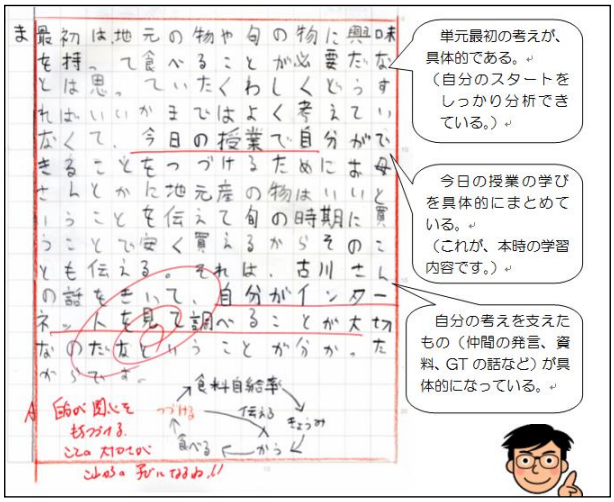
◇考えの変容が分かるように書く→その際に変容を生んだ発言を活用

＜文例＞
わたしは、授業（単元）の前は【最初の考え】だったけど、【授業後の考え】に変わった。それは、【〇〇さんの□□という考え方】を知ったからである。そこで、私は･･･。

【実践：５年生「日常的な指導の歩み」】

単元の導入や終末では，考えの変容をまとめることによって，学びの成長を見届けることができた。また，それを子どもに返すことにより，自分自身の高まりを自己評価することができた。

その上で，視点や立場，見方・考え方を生かして学ぶよさ，社会とのつながりを味わった上で，次の学習に生かす振り返りにもつながった。



【図 15：定着状況の見届けによって変容した児童のノート】

３ 研究の成果と課題

＜成果＞

【写真６：岐阜小６年生が考えた市役所跡地活用案を岐阜市長へ直接提案（説明）する様子】

子どもたちは，社会科の学習後にも学びを生かしながら，地域のために活動したり，社会に向けて発信や提案をしたりすることができるようになった。それは，地域教材を生かし，子どもの意識が連続できる単元構成をしたことで，子どもたちが見通しをもちながら，主体的かつ多角的に学ぶことができるようになったからである。その結果，社会的事象を「自分のこと」として考えることができるようになり，自らよりよい社会の実現を目指そうとする姿につながっていると言える。

また，活動や発信をする中で，問い返しや切り返しを受けたときにも，既習内容や資料を根拠に受け答えをすることができるようになってきた。

それは，社会への関わり方を考える場などで，様々な立場に立って社会のことを考えることができ，それが姿につながったからだと考える。

＜課題＞

子どもたちが学びを実感し，よりよい社会を目指すために「子どもが社会とつながる授業」を進めてきたが，さらに効果的に行うためにも，今まで以上にカリキュラム・マネジメントを大切にしながら，子どもにとってより一層効果的な学びのあり方を考えていきたい。